

に生かして、学習に役立てる方策を考える必要があると痛切に感じている。

（その2）

—易しい内容の通信課題による継続的な対話を—

若 松 茂

「毎回送られてくる課題に答え、その結果をすぐ知らされることによって、一方通行ではない関係が作り出され、学習の励みになると同時に、課題を示されることによって視点がわかり、集中力や理解力に大変役立った」というモニターの方々の感想は貴重である。

事実、全15回の番組を通して、特別モニターの平均回答率（継続率）が「人間の生物学」で75%を越え（遅刻者－郵便事情による場合も含まれる－を加えると83%に達する）、さらに最終試験（理解度を調べるアンケート調査）に回答を寄せた人が、一般モニターの56%に対し、特別モニターでは75%と顕著な差を生じたことは、今回のような、小刻みに行なわれる、比較的易しい課題による双方向性の刺激が、遠隔教育における学習者の動機づけにきわめて効果的なことを示すものと云えよう。

さて「通信指導」は、その名の通りいわゆる通信制教育での主要な教育メディアとして登場し、歴史的に定着して今日に至っている。その機能については、ここで改めて説明を要しないが、「ニューメディア」が華やかに喧伝される昨今、郵送という、古典的なコミュニケーション手段によるためか、とかく等閑視され勝ちのように見受けられるのは残念なことである。

通信指導は、本来特定の学科目等に関する学習指導を目的とするものであるが、隠れた側面として持つ双方向性、すなわち学習者との継続的な対話を形づくることによって、学習意欲を触発させる効果が、今回の研究によって浮き彫りにされたのではないかと筆者らは考えている。

通信指導においてこのような触発的效果を期待するとき、もっとも大切なこ

とは、学習者との双方向の対話を、継続的に実現することであろう。ことさらに難解な課題によって学習者を失望させたり、あるいは採点の結果のフィードバックをいちじるしく遅れさせたりする「一方通行」の指導では、とても所期の効果を期待することは困難であろう。

したがって、課題の内容は、あくまで学習者の特別な負担にはならない程度で、しかし適度に学習の指針を与え、動機づけになるようなもので、さらに付け加えると、一回当りの量は少なく、回数はできるだけ多いことが望ましいわけである。

ちなみに、イギリスの公開大学（OU）では、2月に始まり10月に終る学期中、1単位のコース毎に、TMAS（チューターが採点する記述式の課題）を標準として8回、これにCMAS（コンピューターにより採点を行なう多肢選択の課題）を何回か加えて、実施している。課題はコースチームで作成され、学習センターのチューターが採点に当るシステムになっている。平均して2週間に1度程度の頻度で、課題が学生宛に送られる。S101 科学基礎コースの例では、1983 年度前半に、TMAS を第 3, 9, 10, 15 週に、CMAS を第 5, 7, 9, 11, 13 週に…という具合である。

重要なことは、これらの課題の解答は、チューターに送られ、採点され、大学に記録された後、担当のチューター・カウンセラーや地域事務所にもコピーが送られるが、通常提出後3週間以内に必ず学生本人に返されることである。

このようにして、OUでは1年間に約40万通のTMAS と25万通のCMAS（数字はともに1981年度）を受理している。

260の学習センターに、5千人のチューターを擁し、チュートリアルとアセスメント（通信指導）にかけるOUの熱気のすさまじさを改めて感ずる。オックスフォードにはじまる伝統的なチュートリアル（個別的面接指導）を今日なお重視するイギリスと、画一的マス教育のわが国の現状とを直接比較することは困難であるが、一方通行ではない対話こそ教育の原点であることを想うとき、いわゆる通信指導を（コンピューター通信などのニューメディアの問題をも含めて）、どう対話型の教育方法として、効果的に取り込むことができるかは、

わが国大学放送教育の成否を左右する重要な因子の一つではないかと考えられる。

(その3) — 受講生の把握を滞りなく —

柴 山 盛 生

1. は じ め に

現在、放送大学の開講が間近に迫り、社会的にも大きな注目を集め、その成果が期待されている。今まで遠隔大学について、受講者層、教育内容、教授方法等多くの問題点について論じられてきたが、今後は実際に受講開始に伴う現実的な問題に対処しなければならない必要が生じている。

遠隔高等教育については、発足に至った様々な経緯があるが、新たに機関を発足させるこれからの議論と、実際に機関が在存しそれを展開していく議論とでは、その内容に大きな差があると思われる。例えば、遠隔高等教育が発展するために、社会的にどの様に評価され、どの程度の需要があるかを常に把握し、それに柔軟に対応できる体制を構築することが重要である。この評価のうちで、最も大きな影響をもつのは、受講生からの評価であるが、現在受講生の姿が次第に明らかになりつつある段階である。従って、ここでは受講生に関連する課題について提言する。

2. 高校卒業の社会人を念頭に

放送大学の受講生については、文部省をはじめとするいくつかの機関で調査されてきた。しかし、予想された階層と実際に放送大学に入学出願を行った層（60. 1. 14現在）とは多少異なっていた。この時点での出願状況の大きな特徴は、募集人員 1 万人に対し出願者数は約 4 千人も上回っていたが、その内訳をみると全科履修生に 2 倍以上の出願があり、その他の種類では、ほぼ募集人員通りであった。出願者の最終出身校も、高校・旧制中学卒が全体の約 2/3 を占めており、放送大学は社会人・家庭婦人でも大学卒業資格を得られる所である